

1例, スキー外傷1例である。受傷部位は6例が後頭部で coup injury により発生していた。1例は前頭部であり contrecoup injury と考えられた。

contrecoup injury による小脳挫傷はまれでほとんどの報告が coup injury である。初診時意識レベルは GCS 3, 6の重症例2例と10から15までの軽症例5例であった。7例中6例がテント上損傷を合併していた。GCS 3, 6と GCS 13の症例に手術を行ない GCS 3の症例は死亡した。退院時 ADL は1が3例, 2が1例, 4が2例であった。

死亡例は手術まで17時間経過しており速やかな減圧が重要であると思われた。

O-51) 自然消失後に再出血を来した急性硬膜下血腫の稀な1例

須貝 和幸・本橋 蔵
椎名 巖造・下瀬川康子 (仙台市立病院)
小沼 武英 (脳神経外科)

外傷性急性硬膜下血腫で一旦血腫がほぼ消失したにも拘らず、後日急激に血腫増大を来し昏睡となり、手術により救命し得た稀な1例を経験したので報告する。

症例は69歳男性、交通事故による頭部打撲で CT 上急性硬膜下血腫を認め、当科紹介となった。受傷直後には意識消失を伴ったが、来院時には意識清明で神経学的に異常所見無く、CT 上血腫は縮小傾向で、保存的に経過観察を行なった。受傷翌日の CT では血腫はほぼ消退していたが、受傷2日後突然 JCS200 の意識障害と瞳孔不同・散大を来し、CT で著明な血腫増大を認め、直ちに開頭血腫除去術を行なった。出血点は cortical artery であった。術後経過は良好で GR で退院した。

一旦自然縮小した血腫でもこの様に再出血を来す例もあり、臨床上注意すべきと思われた。再出血の機序は、cortical artery の出血が一時的に止血され、その後血腫の吸収により頭蓋内圧が低下し出血を誘発したものと考えられた。

O-52) 乳幼児慢性硬膜下血腫7例の臨床的検討

昆 博之・府川 修 (磐城共立病院)
原 康子・増山 祥二 (脳神経外科)

〔目的および対象〕CT 導入以後当科で経験した7例の乳幼児慢性硬膜下血腫の治療成績を検討した。内訳は男1例、女6例、年齢は1ヶ月～1歳9ヶ月(平均8.7ヶ月)

月)である。〔結果〕全例痙攣を主訴として入院した。CT 上血腫は両側性5例、片側性2例であり、low density を示すもの6例、neveau 形成するもの1例であった。

4例で穿頭血腫洗浄術のみ、3例ではさらに血腫腔—腹腔短絡術を行った。血腫洗浄のみの4例中2例は術後再発し再手術を行ったが、いずれも血腫洗浄術のみでは不十分と判断し、血腫腔—腹腔短絡術を行った。術後の CT 所見は、5例で血腫腔が消失、2例では硬膜下水腫を認めた。7例中6例は生存、うち4例は通常の学校生活を送り、2例は重度の障害を残している。1例は術後合併症で失った。〔結語〕乳幼児慢性硬膜下血腫では早期に適切な手術治療を行うことによって良好な予後が期待できると考えられた。

O-53) 高齢者(70歳以上)慢性硬膜下血腫の治療

高谷 了・藤重 正人 (砂川市立病院)
高山 宏 (脳神経外科)

慢性硬膜下血腫の治療は、穿頭による血腫洗浄及びドレナージが広く行われている。しかし、高齢者で脳萎縮の強い症例では術後に血腫腔に空気貯留がみられることが多い。今回は術後の血腫腔の空気貯留の占める割合と消失までの期間を検討したので報告する。

【対象と方法】1988年1月から1993年12月までに当科で行った高齢者慢性硬膜下血腫手術例33例(平均年齢80歳)を対象とした。局所麻酔下に穿頭洗浄後ドレーンを血腫腔に挿入した30例の術翌日の CT で残存血腫腔の空気の占める割合を計測し、残存期間を検討した。

【結果】残存血腫腔の空気の占める割合は、19.2%～83.2%で平均46.8%であった。残存期間は最長26日間であった。

【考察】慢性硬膜下血腫術後に血腫腔に空気の貯留は意外に多く治療期間を遅らせる原因となり、血腫腔への空気の流入を防止する工夫が必要である。我々は、最近 Double drainage tube を作製し、血腫洗浄を行っても術後血腫腔の空気貯留をなくする工夫を行っているので報告する。